

## 第63回 小人閑居して不義をなす

IT生

前回書いたマンションの防災計画をめぐる騒動。

その後の総会でも、マンションわきの土砂崩れにこだわる住人の発言があった。

結果として、数人の反対はあったものの住民のほとんどが賛成して計画は成立したのだが、あまりにこだわる住民がいたので、その後調べてみた。

すると、土砂災害の発生要因にかかわる意外なことが判明した。

直接の原因は、現場の木を、景観を損なうという理由で切ったことにより、表土がむき出しとなり、そこへ長雨が降ったことによるものだ。

意外なこととは、長雨の少し前に、大阪北部地震があり、そのことが土砂崩れに影響しているとみられることだ。地震の発生時、在宅しておりその衝撃に驚いたので、さもありませんと考えた。南側のベランダに面するガラス戸に、車が突っ込んできたような衝撃を感じたのだ。つまり、大阪の震源から真横に六甲山の岩盤を伝って、衝撃波が飛んできたという実感だった。実際、マンションの土砂崩れの現場の上方も崩れており、そこは、別の管理者がすでに行政とかけあって補強工事を終了している。

結局、マンションわきの土砂災害の発生は、木の伐採→地震→地盤の緩み→長雨が原因であることがわかった。



議論の的となったマンションわきの土砂崩れ現場

こうした事情を確認せずに、現象だけみて、「めったに起きない地震のための防災計画よりも、目先の土砂崩れ対策のほうが大事だ」という反対意見になっているのである。

賛否には影響はしなかったが、防災計画の中間報告、総会と二度にわたり議事の進行のさまたげとなったことは否めない。

木の伐採に至った経緯も、住民個人が、理事会にはからずに、土地の持ち主に苦情を申し立てたことから始まっている。ほぼ人災の体だ。

防災計画に反対した御仁は「遠い先の防災計画より、今そこにある危機に目を向けよう」と言い放ったが、日本の災害の発生状況や事実関係をわきまえず、感情のままに大声で意見を申し述べる身勝手さこそが「今そこにある危機」といえまいか。

木の伐採をもうしたてた住民といい、まさに、小人閑居して不義をなす、である。

(令和2年10月)